

# NJ素流協 News

平成23年 4月30日 第76号

平成23年 4月30日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)  
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

## 平成23年度

### NJ素流協事業計画案まとまる

平成23年度の事業開始にあたり、NJ素流協事務局では今年度の事業計画を次の通り立案した(一部要旨)。本案は来る5月30日に開催する通常総会に諮る予定である。

#### I 事業計画の「基本方針」

「がんばろう日本」「がんばろう東北」の合言葉で始まる今年度は、組合員一人ひとりが力を合わせ、さらなる結束を強め新たな局面への一歩を踏み出す年度となる。

現在、わが国の森林は資源として量的に充実しつつあるが、林業採算性の低下等から資源が十分に活用されないばかりか、必要な施策が行われず多面的機能の発揮が損なわれ、荒廃さえ危惧される状況になっている。一方国際的には、環境問題において森林の持つ役割の重要性が認識されるとともに、輸入材をめぐる状況が不透明感を増しており、我が国の安定的な木

材供給に対する期待は一層高まってきた。

平成21年12月に農林水産省が作成した「森林・林業再生プラン」

は、森林資源を最大限に活用することを通して、雇用の拡大に貢献

し、わが国の社会構造を環境に負荷の少ない持続的なものに転換していくものであり、平成22年6月閣議決定された「新成長戦略」において、「国家戦略プロジェクト」の一つに位置付けられている。昨年11月には、「森林・林業の再生に向けた改革の姿」が公表され、森林・林業の再生は、山村のみならず、21世紀のわが国全体の成長を支える分野として大いに期待されている。

東日本大震災で物心両面で大きな被害を被ったわれわれ組合員は、森林・林業を復興・再生させ真の国産材時代を樹立するために、今

年度を復興改革元年と捉え、森林・林業が大きな転機を迎えたことを真に認識し、この時をチャンスに変え自らが立つという意識と気概を持つとともに、時代の変化にも柔軟に対応しながら積極的かつ合理的な事業展開を図っていくこととする。

#### II 事業計画

##### 1 共同販売等に関する事業

組合員が生産する素材及びシス

表 平成23年度事業計画量(案) (単位: m<sup>3</sup>)

区分		材積(m <sup>3</sup> )	前年度実績量との比較(差)
合板用素材	組合員生産によるもの	220,000	(Δ 47,640)
	システム販売によるもの		
製材・集成材用素材、土木用素材、他			
合計		220,000	(Δ 47,640)

注: ( ) 書きは前年度実績量との比較(差)

テム販売協定による素材を、委託を受けて組合が需要先へ安定的に供給する。

合板用素材については、被災した岩手県沿岸部工場の受入再開までの間、組合員の安定的出荷要請に対応するため、前年度の組合員生産による実績量21万8388m<sup>3</sup>の出荷先確保を最重点で行い、併せて製材・集成材用、土木用素材の供給にも積極的に取組むこととし、全体としては、システム販売等による出荷の減少量を折込んだ22万m<sup>3</sup>(前年実績量比82%)を当初計画量とする。

なお、年間計画量については、今後の合板工場等の復興状況及び木材業界全体の動向等を見据えながら中間段階で修正を加えるものとし、今年度においても更なる出荷量の増大と出荷先の拡大を目指すこととする。

## 2 教育及び情報提供に関する事業

組合員等に対し経営管理及び生産技術の向上、情報の提供を図る

ため実施する。

(1) 研修会、講習会、見学会の開催

① 組合員の後継者を対象とした経営技術研修会を年4回程度開催する。

② 組合員の雇用する従業員に對して生産技術の向上を図るため、作業路開設研修会、市況説明会等を年各1〜2回程度開催する。

(2) 情報提供

① 組合員の事業活動並びに取扱う素材の情報提供・交換のため、「素流協ニュース」(月1回)、「立木公売情報」(四半期1回)の発行、ホームページ(随時)の更新を行う。

② 合法木材、地域材の供給を促進するため、合法木材供給及び県産材認証に関する情報提供を随時行う。

③ 労働安全及び生産技術向上のための研修会等に関する情報提供を随時行う。

## 3 利用拡大等に関する事業

組合事業の充実・拡大に資する

ために実施する。

(1) 素材利用拡大実証事業

木質系バイオマスの有効活用の観点から、いわゆるC・D材について、エネルギーおよびマテリアルの両面への利用拡大を目指して実施する。具体的には、パルプ用をはじめ、熱源用、おが粉用、畜産敷料用としての木質系バイオマスの品質や規格、数量等を把握するとともに、円滑な供給システムの実践的検証を行い、安定的需給体制の構築に努める。

(2) フォレスト再生モデル実証事業  
植栽未済地の解消を目的として、主伐から植栽・下刈までの低コスト作業を実証し、人工林の更新システムを構築するものであり、2年目の今年度は、昨年度実証地の調査・検証と新たな実証作業を行う。(10箇所)

(3) 国産材利用拡大推進需給協議会の開催

木材の需要側と供給側が一堂に会し、行政や中央団体の指導を受けながら、国産地域材の利用拡大、

安定取引の向上へ向けた協議を行う(年2回程度開催)。

## 4 受託事業

組合並びに組合員の事業促進に資するため、国や県、林業関係団体等からの受託事業を行う。

① 岩手県森林整備加速化・林業再生協議会事業

② 合法木材供給認定事業者モニタリング事業

③ 平成23年度補正予算事業(木材供給等緊急対策)

④ その他当該組合の事業内容に合致する県等補助事業

## III 諸会議の開催

### 1 第8回通常総会

平成23年5月30日(月)盛岡市にて開催する。

### 2 理事会

共同事業の進捗状況を見据えて、四半期に1回程度開催する。

### 3 地区懇談会

組合員に対する情報提供、要望収集を進めるため、地区懇談会を県北・県南・沿岸・県外地区各1回開催する。

一葉

山

火

事

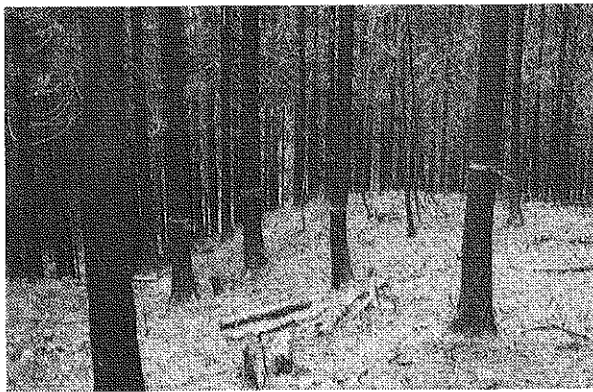


写真1 山火事後のスギ林(岩手県紫波町)

春は、気温の上昇と共に山の根雪が解けて地表が現れてくる。これに乾燥した季節風が吹いて、山火事の最も危険な時期である。岩手県内でも昭和36年の三陸大火による5万杉を越す被害をはじめこの時期に多くの山火事が記録されている。

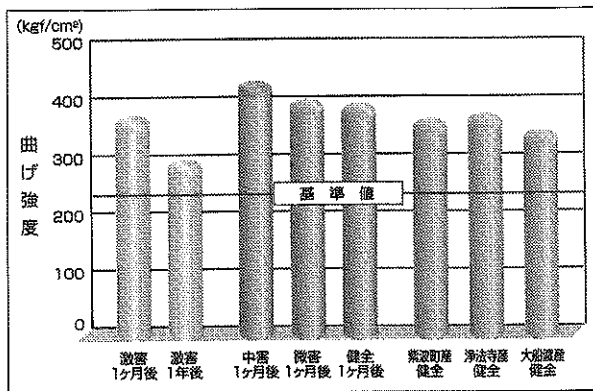


図1 被害木の強度性能

けで、樹幹はそのままの状態のことが多い。(スギ林の例) 岩手県林業技術センターでは、これらの被害木の材質を調査した。その概要を紹介する。

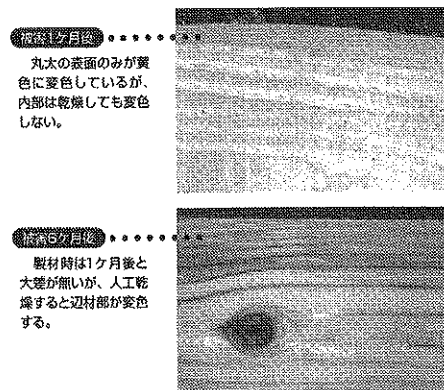


写真2 被害木の変色

測定した。被害木でやや低下が見られたが、中、被害木では対照木との差は無かった。どの被害木ともスギ材の基準強度以上であり、構造材としての利用に問題は無い。

(写真、図は岩手県林業技術センター新技術解説シリーズ11から)

調査木は、共通して地際の片面に異常が認められ、断面には被害当時の形成層が壊死した後が見られる。被害後は壊死部を巻き込みながら肥大生長を続けており、地上高2m以上では樹皮および幹の内部には異常が見認められない。

○生存木の幹内部

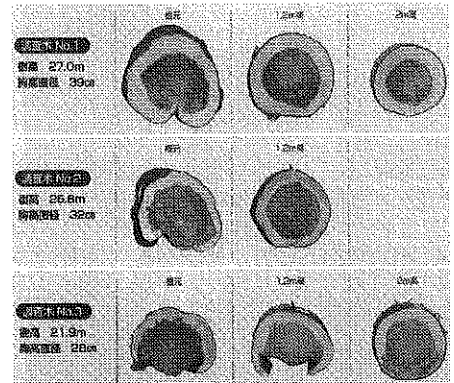


写真3 28年前の被害木の状況

28年前の被害地で、枯死を免れたスギの幹の内部の状況を調査した。

# お知らせ

平成22年度フォレスト再生モデル実証事業の実施状況は次のとおりです。(実施組合員、実施場所、実施面積、植栽樹種の順)

▽上北森林組合、青森県七戸町鉢森平、0・51<sup>ヘクタール</sup>、スギ

▽横澤林業(株)、岩手町川口(南山形)、1・00<sup>ヘクタール</sup>、カラマツ

▽〃、岩手町川口(丸泉寺)、1・00<sup>ヘクタール</sup>、カラマツ

▽(株)吉本岩泉事業所、岩泉町穴沢字金成、1・00<sup>ヘクタール</sup>、カラマツ

▽遠野林業、陸前高田市広田町小屋敷、1・00<sup>ヘクタール</sup>、スギ

▽(有)丸大県北農林、洋野町種市里、1・00<sup>ヘクタール</sup>、カラマツ

▽二戸林業、二戸市安比字石蔵、1・00<sup>ヘクタール</sup>、カラマツ

作業道散策

13

山鳩

一般的には「やまばと」で知られているが、正式な名前は「キジバト」で、独特な低音で「デデーポーポー・デデーポー」と連続して鳴く。体全体に茶色のうろこ状の模様があり、これがキジの雌とよく似ている(写真1)こと

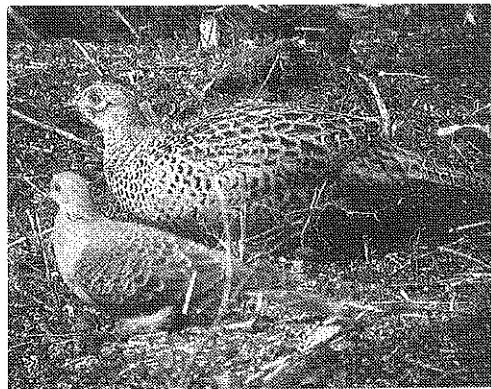


写真1 左:キジバト、右:キジ雌

から名付けられた。人里近くの里山に生息し、歌や民話によく登場するが、春に大豆の芽、秋にはアズキを好んで食べるので害鳥扱いされる。

カップルでの行動が目立ち、ラブコール、寄り添い、仲良く水浴びや日向ぼっこ、交尾など様々な姿を見せてくれる(写真2)。この姿は、ハト派の表現のとおり真に平和的である。

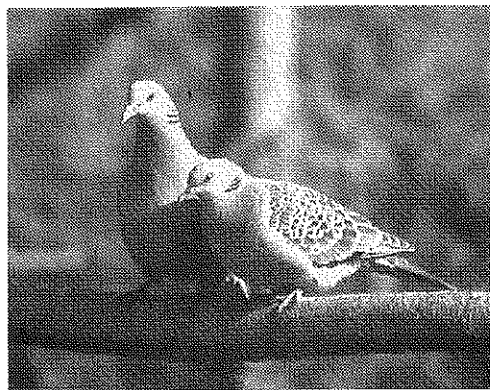


写真2 キジバトのカップル

お寺や公園に群れて居るのは「ドバト」で、こちらは伝書鳩が逃げた野生化したものである。ちなみにドバトの鳴き声は「グググ・グググ」と極めて地味で、遠くまで聞こえる轉りはない。

ところで、「ぼっぼっぼ・はっぼっぼ」で始まる文部省唱歌の題名は

「鳩」(作詞者・作曲家不明)で、「鳩ぼっぼ」(東くめ作詞、滝廉太郎作曲)とは別の歌である。これらの歌の鳩は豆を食べたりお寺の屋根から下りてきて、ぼっぼっぼと鳴くが、こちらは関東地方に生息する天然記念物のシラコバトとの説もある。

冗談欄 老後は子供に還り早寝

今年は大震災で桜の花は見なかったような気がするし、木々の葉も気付かない間に緑になっていた。

大きな出来事に右往左往している間に春は過ぎ去ろうとしている。

「春眠暁を覚えず」とは高校時代の漢文で習ったと記憶しているが、歳をとったためか、春でも眠くないのである。

目覚めや眠気などは、「体内時計」によっていると言われる。

「体内時計」の一日は、24時間より長いが、毎日光や音によって24時間に修正されている。また、体内時計の一日は、年齢をとるに従って短くなり、その程度は男性の方が短いそうである。

そのせいかわからないが、この頃夜7時を過ぎると眠くなるので、早々と寝てしまうことが多い。

ある時、甥に街で会ったら「もう風邪は治ったのですか」と聞かれた。それから10日程して今度は姪から「風邪は治ったのですか」とまた聞かれた。

風邪などひいていなかったのに、不思議に思っていたら「風邪気味なので寝てしまった」とおばさんが言っていたのですからとのこと。

どうも早く寝てしまおう夫が格好悪いので、夜に電話がかかってくると「風邪気味なのでもう寝てしまいました」と答えてくれるらしいことが判明した。

平成23年4月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約3,920m<sup>3</sup>減少、カラマツが約1,230m<sup>3</sup>減少、アカマツが約1,310m<sup>3</sup>減少し、全体では約6,440m<sup>3</sup>減少している。昨年同月と比較すると、スギが約5,620m<sup>3</sup>減少、カラマツが約6,190m<sup>3</sup>減少、アカマツは約1,120m<sup>3</sup>減少し、全体では約13,000m<sup>3</sup>減少している。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は前月より約90m<sup>3</sup>増加している。
- 2 その他(合板用以外)の出荷量は前月より約4,540m<sup>3</sup>増加、昨年同月より約2,570m<sup>3</sup>増加している。
- 3 今年度の年間計画量(案)に対する1か月あたりの出荷量の割合(目標達成率)を8.3%とすると、今月の全体出荷実績は、計画数量(案)を2.7ポイント下回る進捗状況となっている。

(m<sup>3</sup>)

樹種	長級(m)	当月出荷量			今年度累計			
		合板用	その他	計	合板用	樹種別割合(%)	その他	計
スギ	2.0	2,978			2,978			
	4.0	398			398			
	計	(177) 2,845	3,466	6,842	(177) 3,375	56.2	3,466	6,842
カラマツ	2.0	2,090			2,090			
	4.0	240			240			
	計	(95) 2,330	1,384	3,714	(95) 2,330	38.8	1,384	3,714
アカマツ	2.0	270			270			
	4.0	10			10			
	計	(0) 281	1,265	1,546	281	4.7	1,265	1,564
その他針		21	58	80	0 21	0.4	58	80
広葉樹			118	118	0	0.0	118	118
合計		(272) 6,007	6,291	(272) 12,299	(272) 6,007	100.0	6,291	12,299
目標達成率(%)								5.6
計画量								220,000
バイオマス用針葉樹チップ材(単位:トン)				0				0

( ) はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

最近、「国産材時代」という言葉がよく使われる。とりわけ平成21年12月、政府が、わが国の森林・林業を再生していく指針として「森林・林業再生プラン」を策定した以降、森林・林業・木材産業の分野では「国産材時代」の声のオンパレードと言っても言い過ぎではない。筆者も「国産材時代」の到来を期待するもの一人ではあるが、それにしても少々この国産材時代という言葉に酔っているのではないかと、「酔っている」という表現が適切でなければ「昂揚している」と言い換えよう。誰かが言っていたが「昂揚感」というのは、ともすれば自失を誘うものである。から、これはなかなか警戒を要するものなのである。

2020年、すなわち10年後には木材自給率を50%にするという。林野庁の試算によると、実は二通りの試算があるのだが、いずれにしても10年後の国産材自給率が現在の2倍以上の量になっている。この試算に当たっては、「住宅着工戸数」や「総需要量」などに推定値としての一定の前提条件が定められている。推定値はあくまでも予測であり、一種の期待値といってもよいであろう。今後10年の間に社会的・経済的な変動はもちろんのこと、今年3月11日に東日本太平洋岸地域を襲った大震災とそれに伴う大津波に見るよう突発的な自然的変動が起こりうるが、これらはなかなか予測できない事象である。ここでは予測困難な事象については置いておくことにして、「10年後の木材自給率50%以上を目指す姿」を

現するためには不断の努力が必要なのは論をまたないであろう。わが国の森林資源をみると量的な充実度には著しいものがあり、現在でも量的潜在産出能力は十分に具備している。量的潜在産出能力という限定的な意味においては国産材時代に入ったと言えるかもしれない。しかし、筆者は、いまだ「真の国産材時代」に入ったとは考えないのである。

真の国産材時代とは、国産の森林木質系原材料(「森林バイオマス」といってもいいかもしれない)の国内における需要・供給のバランスする条件が満たされたとき(整備されたとき)に到来したといえよう。

ここでいう「需要・供給のバランスする条件」とは、国産材自給率50%以上という数値目標が達成された時の姿が、①国産森林木質系原材料を使用した建築資材等木材製品や紙・パルプ製品、エネルギー原料として消費者に十分に受け入れられること、②わが国木材産業界等が国産森林木質系原材料を十分かつ有効に利用すること、③国産森林木質系原材料の生産者側が木材産業界等の求める条件に適合した原材料を適時適切に供給すること、④伐採跡地が適切に植栽等がなされ、健全な森林が再生されること、という4点が十分に満たされていることである。この4つの「需要・供給のバランスする条件」が整備・定着化し、それが連結環を形成したものを仮に「日本型森林資源サイクル」と呼ぶならば、真の国産材時代を迎えるためには、「日本型森林資源サイクル」の形成定着が不可欠である。